

倫理の脱構築と再構築¹

ティム・オ布莱エン *Going after Cacciato* における魔術的表象

阿部 幸大

1. 戦争の倫理化——「テロとの戦争」からベトナム戦争へ

ジョージ・W・ブッシュが9.11をうけて表明した「テロとの戦争」(War on Terror)という表現は、アメリカが戦争にまつわる言説へ新たな審級を導入したものであるとしばしば論じられている。その新しさは、「敵」概念の変容にある。「テロとの戦争」における「敵」は、たとえばウォルター・ベン・マイケルズによれば、「ある政治制度やある国民への脅威ではなく、法への脅威を示す者として」(291)、あるいはアントニオ・ネグリとマイケル・ハートによれば、「いわば大文字の敵 [the Enemy]、倫理的秩序にとっての絶対的な脅威」(『<帝国>』28)として規定される「敵」である。² さらに、『<帝国>』の続編である『マルチチュード』において、ネグリとハートは上記の「新しさ」を、近代戦争が追放したはずの「正戦」(just war)概念の現代的回帰であるとして詳しく論じ、「この正戦という概念の復活にともない、はたせるかな、それと結びついた悪という概念もまた現れることになる。敵を悪と決めつけることによって、敵および敵との戦いを絶対化し、政治の埒外に置くことが可能になるのだ」(49)と述べている。つまり、「テロとの戦争」が想定する「敵」とは、政治的な敵ではなく、いわば倫理的な「敵」、すなわち「悪」であり「不正」である。言い換えればそれは、戦争を脱政治化・脱イデオロギー化し、倫理化するものなのだ。

仮に「テロとの戦争」の「新しさ」が戦争の倫理化にあるのだとすれば、その「新しさ」を歴史的に見定めるためにも、われわれはいったんベトナム戦争に遡る必要があると思われる。遅くとも55年には開始されていたベトナム戦争は、³ 誰もが知るようにパクス・アメリカナの後退を決定づけた「名誉なき戦争」(War without Honor)だったのであり、アメリカをして自らの善性とイノセンスとを根本的に疑わしめる戦争であった。たほう、50年代以降、冷戦アメリカはソ連の共産主義をナチズムとの強引なアナロジーによって「悪」であるとプロパガンダし、ひるがえって自らを、リベラリズムという脱イデオロギー化された理想を代表する「善」の国家であると規定した——つまり東西対立はイデオロギー闘争ではなく、善悪の、倫理的対立であるとアメリカは主張した。ベトナム戦争の状況が「テロとの戦争」のそれと全く同じであるとはもちろん言えないにしても、戦争の倫理化という点において、われわれはこれらの類似を無視すべきではない。

上記のような見地に立ち、本稿は1978年の全米図書賞受賞作品であるティム・オ布莱エンのベトナム戦争小説、*Going after Cacciato* における倫理の問題を考えてみたい。この作品の問題意識は、ベトナム戦争にとどまらず、アメリカにおける戦争と倫理の問題

一般へと拡大する射程を秘めていると考えられ、21 世紀にこそ読み直されるべきベトナム戦争小説のひとつであるからだ。以下ではまず、しばしば「魔術的リアリズム」という用語で形容される本作品の著しい美学的特徴を、トラウマの表象不可能性（ゆえのリアリズムからの逸脱）の相関物であるとする説明に一定程度の正当性を認めながらも、その問題点を指摘し、むしろ *Cacciato* における魔術的表象は善悪二元論の脱構築の効果なのだと論じる。つづいて、小説中盤においてこの魔術的表象に亀裂が生じ始めることに注目し、倫理の脱構築ならびに魔術的表象がアメリカの文化的帝国主義と共犯関係を結んでしまうことを見る。さらに、物語が終盤に入ると、主人公は勇気とイノセンスの問題に直面せざるを得なくなるが、最終的な帰結として、主人公は自らの臆病とイノセンスの喪失とを受け入れ、いったん脱構築した倫理を別のエコノミーにもとづいて再構築しながら、現実（リアリズム）へと回帰することを自らの意志と責任によって選択すると論じてゆく。その過程でわれわれは、*Cacciato* における戦争と倫理の関係の考察がもつ、21 世紀における戦争の倫理化という「新しい」問題に対する批判的なポテンシャルを確認してゆくことになるだろう。

2. “The Land Is Your True Enemy”——善悪二元論の脱構築と魔術的表象

78 年に *Cacciato* が出版されると、ガルシア＝マルケスを筆頭とするラテンアメリカ文学のいわゆる〈ブーム〉からさほど時間が経っていなかったこともあり（たとえば『百年の孤独』の英訳は 1970 年）、ある書評はこれを「魔術的リアリズム」と形容したし、のちにも多くの論者が同じ言葉を用いてきた。⁴ この表現で総括される方法論は、サルマン・ラシュディのような旧植民地出身の作家、あるいはトニ・モリスンのような黒人作家など、主に「被抑圧階級」としての自覚を持つ作家たちによって採用される形で世界中に伝播し、抑圧階級からの借り物の言葉では語れない彼ら独自の物語を可能にするツールとして重宝されてきた。したがってこれは、外傷的体験を語ることの不可能性というトラウマ理論と非常に親和性が高い。

ここでは印象論めいた言い方になってしまうのだが、たしかに *Cacciato* は「魔術的リアリズム」と呼びたくなるような手つきでリアリズムから逸脱してみせる物語である。その物語とはすなわち、「パリが見たい」と言って無許可離隊（AWOL）したカチアートを追いかけて小隊ごとパリまで行ってしまうという、主人公＝語り手のポール・バーリン（Paul Berlin）による空想からなるメイン・プロットと見做しうる「パリ・プロット」が全 46 章中 20 章（分量的には約 2/3）を占め、その空想を巡らせている物語の現在である“The Observation Post”と題された 10 章と、主に味方の米兵の死に関するバーリンの断片的な「記憶」が三人称の語り手によって語られる 16 章とがパリ・プロットを中断する——といった形式のもとに進められてゆく物語である。このうち魔術的な表象を展開するのは、パリ・プロットだ。

Cacciato における魔術的表象の具体的な場面についてはすぐあとで検討することにし

て、まずは「魔術的リアリズム」というタームを用いて本作品を詳細に分析したウージェーヌ・アルヴァを参照しておきたい。アルヴァは主人公バーリンと著者オブライエンのあいだに相同性を認めつつ（Berlin は O'Brien の不完全なアナグラムになっている）、*Cacciato* が魔術的表象を採用するのは、それが「伝統的なリアリズムのミメシス」では表象不可能な現実を「ナラティヴ」へと秩序立てて整理することを一定程度可能にするためであり、またそれはトラウマ／PTSD に対する、一種の「セラピー」として機能すると論じる（275）。

だが、このいわば表象不可能性の解決策としての魔術という説明には、ひとつの問題点がある。もちろん、バーリンのトラウマティックな体験が彼の空想を引き起こしていることも、直接・間接にベトナム戦争を題材にした小説を書き続けているオブライエンが個人的なトラウマを抱えているらしいことも、どちらも正しいだろう。しかし、ハル・フォスターがいみじくも述べているように、トラウマ理論というものは、脱構築とアイデンティティ・ポリティクスを「魔術的に」——偶然にもフォスターはこの語彙を用いている——両立させてしまう（168）。どういうことかと言えば、トラウマ的主体を想定することは、ポスト構造主義的な分裂を抱えた脆弱なあるいは空虚な主体と、誰にも共有され得ない特異な体験を持つ他ならぬ私としての強固な主体とを、同時に成り立たせてしまうことを意味しているのである。そしてこれが問題含みなのは、トラウマ理論は過去の外傷的体験を表象不可能なものとして神秘化してしまうがゆえに、本質主義と避けがたく親和的であるためだ。

トラウマ理論が孕む本質主義的傾向は、さらに、ベトナム戦争という特定の歴史的出来事においてよりいっそう大きな「問題」となる。なぜなら、アメリカのベトナム戦争ナラティヴにトラウマ理論を適用して読む行為は、ベトナム戦争そのものをアメリカの歴史にとってのトラウマとして定位することと相似的だからである。そのとき、現実の表象不可能性というスティーヴン・クレイン以来のアメリカの戦争小説における古典的なテーマは、ベトナム戦争におけるアメリカの歴史的過失を積極的に忘却し隠蔽する口実となる。われわれは別の方法で *Cacciato* の魔術的表象の意味をつかまえてはならない。

Cacciato のリアリズムからの逸脱は、まず武装したままパリまで行ってしまうという荒唐無稽な設定に見出さるわけだが、そのプロット内においてもっとも「魔術的」という印象を読者に与えるであろう場面をまずは検討してみたい。地響きとともに地割れが生じ、バーリン一行が（かなり長い時間をかけて）地下に呑み込まれる、ひときわ印象的なエピソードである。彼らが “softly”（83）に着地すると迷路のような地下トンネルが張り巡らされており、そこにリ・ヴァン・ゴク（Li Van Hgoc）という名の元ヴェトコン少佐が生活している。この空想上の人物はバーリンが初めて目にする “the living enemy”（85）で、主人公はここぞとばかりに質問を浴びせかける——

“How, he asked Li Van Hgoc, did they hide themselves? How did they maintain such quiet?

Where did they sleep, how did they melt into the land? Who were they? What motivated them—

ideology, history, tradition, religion, politics, fear, discipline? What were the secrets of Quang Ngai? Why did the earth glow red? Was there meaning in the way the night seemed to move? Illusion or truth? How did they wiggle through wire? Could they fly, could they pass through rock like ghosts? . . . Why was the land so scary—the criss-crossed paddies, the tunnels and burial mounds, thick hedges and poverty and fear?” (85-86)

ベトナム戦争において米兵の抱いた恐怖——と敗因のひとつ——が敵の姿を目視できないことに由来していたのは一般的にも知られているが、バーリンの質問もまた敵の不可視性に集中している。また彼は人と土地とを融合(“melt”)させるかのようにして、まるで土地それ自体が生きた敵であるかのように思いなしている——というより彼は、敵の姿を“scary”な土地としてしかイメージすることができない。そしてこの興奮気味のバーリンに対して、少佐は鷹揚に答える——“The soldier is but the representative of the land. The land is your true enemy” (86)。すなわち、敵の不可視性という視覚的事実は、敵の脱人称化という認識論的・美学的効果をもたらすのである。

そこで思い出されるのは、フレドリック・ジェイムソンが『政治的無意識』の「魔術的物語」と題された章において、善悪の脱人称化が魔術的表象に帰結する理論的必然性を論じていることである。この章の目的は、ノースロップ・フライが本質的に二項対立的な形式として整理した「ロマンス」というジャンルを、⁵ 善悪二元論の崩壊を記録するジャンルとして書き換える試みである。そこでジェイムソンは、ニーチェに注目する。いわく、「ニーチェは、正の項と負の項を、最終的には善と悪の区別と同じものと考えた」。言い換えれば、ニーチェにあっては「形而上学ではなく倫理学が、二項対立についての有効なイデオロギーとなる」(199-200)。つまり、二元論的思考一般は倫理学に帰着する——

ニーチェは一般に「善」によって意味されるのは、攻撃不可能な力の中心としての自分自身の立場にすぎぬのだ、ということを証明した。この自分自身の立場との関係から、〈他者〉あるいは弱きものの立場は、実際の状況のなかで拒まれ周縁に追いやられてゆき、最終的には悪の概念でもって定式化されるのである。(205)

本論の文脈でこの一節をアメリカによる戦争の倫理化というふるまいに重ね合わせないことは難しい。が、さしあたりジェイムソンによる倫理学の非ニーチェ的な書き換えを確認しておけば、時代の変化にともなって〈他者〉を見出すことができなくなった時点において、ロマンスという形式があらわれる。⁶ そのとき、それまで〈他者〉の他者性(=悪)に依存していた勧善懲悪の物語などは、その形式は保持したまま、なんとかして〈他者〉を「悪」と見做さないストーリーを構築する必要に迫られる。では、そのような状況においてなお「敵を悪い」と(つまり、自分とは異なっていて、しかもなにか絶対的な相違をもっている)と思うには、いったいどうすればよいのか。この悩ましい疑問に対してなされた象徴的な解

答が、ロマンスであった」(207)——すなわち、他者を「悪いと思う」ことの不可能性をパフォーマティヴに記録する形式として、ロマンスはあるわけだ。

これのどこが「魔術的物語」なのだろうか？ ジェイムソンは以下のように結論づけている。

悪の意味素は……、対人的・世界内的関係の領域から締めだされることになり、その結果、その本来の性質からして、浮遊する離脱した要素へと、邪悪な視覚的幻影へと、投影され再組成される。すなわち、魔術や魔法の力がはたらく「領域」である。それがロマンスの「世界」の意味素的構成を設定し、そのうえで、擬人観的な担い手や風景といった、ロマンスに暫定的に付与される要素を決定するのである。(208)

いささか単純化すれば、善悪が「対人的関係」に見出せなくなったとき、悪は非人間的な「領域」へと投影され、それと同時に「悪」という価値判断は倫理的に中性化され、魔術的表象へと転移するというわけである。

Cacciato における魔術的表象の出現は、上記のプロセスをかなり正確になぞっていると言える。それは第一に敵の不可視性というベトナム戦争における兵士の体験から出発しながら、悪としての敵を見出すことの不可能性と魔術的表象との美学的な必然的關係を示すことを通じて、最終的には、戦争の倫理的正当化というアメリカの言説に対する政治的な批判の身振りへと接続されているのだ。このような意味において、*Cacciato* における魔術的表象の出現は、トラウマの表象不可能性の昇華としてではなく、善悪二元論の脱構築の効果として読みかえられるべきである。

3. “They Did Not Know Good from Evil”——文化的帝国主義との共犯関係

バーリンの空想行軍がラオス・ミャンマー・インドを経て、イランに入ると、やがてその荒唐無稽な発想に無理が生じはじめる。それはイランで彼らを逮捕するラロン大尉 (Captain Rhallon) が何度も念を押して確認しているように、彼らの身分は soldier なのか tourist なのかという問題として現れる (190)。そこで後者を自称して釈放される彼らの選択は、重大な意味をもつ。なぜなら、ツーリズムはアメリカの帝国主義と切り離すことができないからだ。もちろんヨーロッパの帝国主義にもツーリズム的傾向は大いにあったわけだが、アメリカのそれは脱政治化されているように見えてしまうという点が問題となる。フレドリック・ジェイムソンは *Postmodernism* で、アメリカのグローバルなツーリズムは「怠惰な好奇心」⁷ を発揮し、歴史的にも空間的にもあらゆる対象を表象の次元において取り込む傾向があると論じているし (361)、またトビー・ハーツォグは、バーリンの空想する各国のイメージはハリウッド映画やポップ・カルチャーといった合衆国のメディア表象に依存していると述べている (92)。⁸ つまり、バーリンの空想がユーラシア大陸を踏破してベトナムからパリに到達するという荒唐無稽な発想と、その旅程を描くことを可能に

する一連の表象は、アメリカの「文化的帝国主義」⁹に依存していることが徐々に明らかになってゆくのだ。このときすでに、序盤で魔術的表象を可能にした善悪二元論の脱構築は、イデオロギー的中立性——イノセンスと言い換えてもいいだろう——を自称しながら拡張してゆくアメリカのグローバリズムへと合流している。¹⁰ この点についてキャサリン・キニーは「イノセンスと帝国がポール・バーリンのプロットを構造化している」といみじくも述べているが（49）、まさしくイノセンスと帝国の共犯関係への自覚こそ、主人公が倫理の問題ならびにリアリズムへと回帰してゆく通路なのである。

ベトナム戦争においては民間人が昼間は武器を地面に埋めて隠し、夜になるとゲリラとして活動していたため、誰が敵なのか判断がつかないということもまた大きな特徴であったが、この事実は、後半のある重要な「記憶」の章において、イノセンスと善悪の問題へと接続されている。“The Things They Didn't Know”という、タイトル通りイノセンスを扱った章は、“Not knowing the people, they did not know friends from enemies”（262）と述べ、金のイヤリングをした負傷したベトナム人少女に関するバーリンの記憶を蘇らせる。バーリンとほぼ区別がつかないこの章の語り手は、“He *had* no enemies”と強調して“wrong intentions”の欠如を訴え、アメリカ＝味方／ベトナム＝敵という図式から距離を取ろうとし（善悪の脱構築の継続），“Could she see him as just a scared-silly boy from Iowa? Could she feel sympathy? In it together, trapped, you and me, all of us: Did she feel that?”というように戦場における罪なき者たち同士のシンパシーを期待する。つまり、突如として国家に徴兵されたに過ぎない自分は個人としては何も知らないイノセントな存在なのであり（“He was innocent. Yes, he was. He was innocent”）、その点では少女と同じく被害者の立場にあるというわけだ（263）。もちろん、善悪二元論の脱構築家たるわれらが主人公は、そのように考えもするだろう。

だが、タイトルにある「彼らの知らなかったこと」をつぎつぎと列挙しつづけるこの章は、彼らは本当に何ひとつ知らなかったのだと主張するその執拗さ・過剰さゆえに、彼らのイノセンスを読者に納得させるのではなくて、むしろそれを疑わせる効果を持っているように思われる。その疑念は、語り手がこの章を“*They did not know good from evil*”（271）という一文で結ぶとき、倫理の問題と結びつく。ここでわれわれが考えねばならないのは、彼らは序盤において戦争を正当化するために持ち出される善悪二元論を脱構築することには成功したかもしれないが、しかしそれは、すでに兵士としてそこへコミットしてしまっている彼ら自身の、個人としての倫理までもが不問に付されることを意味してはいないということだ。彼らは、もはや「何も知らなかった」と白を切ることはできない——78年に帰還兵としてベトナム戦争小説を執筆していたオブライエンは、間違いなくそのことを意識していたはずだ。そして *Cacciato* というテキストは、もうひとつの倫理の再構築というかたちで、リアリズムへ回帰することの責任と向き合う。

同じ章で、主人公は自分が徴兵に応じざるをえなかった理由を以下のように説明している——

He just didn't know if the war was right or wrong or somewhere in the murky middle. And who did? Who really knew? So he went to the war for reasons beyond knowledge. . . . He went to the war because it was expected. Because not to go was to risk censure, and to bring embarrassment on his father and his town. (264)

この“reasons beyond knowledge”による従軍の選択というオブライエンが繰り返し扱うテーマを、三浦玲一は「理性ではなく身体による判断」(25)であると述べている。¹¹ これもまた倫理的言説からのデタッチメントを示しているだろう。だがそれは責任の所在を曖昧にしてしまう危険を伴っているし、さらに言えば上のブロック引用を額面通りに受け入れてしまうことは、責任を故郷へ転嫁することに同意してしまうことになりかねない。この言説、すなわちベトナム戦争で目の当たりにした不正の責任を故郷すなわちアメリカに押しつけることで、翻って自らのイノセンスを確保するというふるまいは、アメリカが〈他者〉を悪と見做すことで自らを善と表象する身振りの反復以外の何ものでもない。ベトナム戦争従軍兵が負傷したベトナム人の少女に共感を求めるというすでに引用したメンタリティも、ウォマックが「犠牲者の政治学」(813)と、あるいはセルツァーが「アメリカの傷の文化」と呼ぶイデオロギーの症候だと考えてよい。念のため付け加えておけば、もちろん本稿は、ベトナム戦争帰還兵に同情すべきでないとか、彼らを積極的に断罪すべきだと主張したいのではない。そうではなく、オブライエンは自らの責任を回避することよりも、それに正対することを目指して *Cacciato* を執筆したはずだと考えたいのだ。

まとめよう。*Cacciato* というテキストは、第一に、いわば国家の倫理的言説を脱構築し、それが魔術的表象へと結果していた。だがそれは、彼が soldier としての責任を放棄し、tourist として自己規定するようになる小説中盤から、ベトナム戦争従軍兵としての自らの倫理を忘却するためのエクスキューズに変貌しており、それは同時にまたアメリカの帝国主義と共犯的でもあった。彼が終盤において向き合うのは、個人としての倫理の問題だ。この問題は彼に、イノセンスの不可能性の自覚というかたちで訪れる。以下でその点を検討しよう。

4. “Reality Always Catch You”——勇気と再構築される倫理

Cacciato という小説は戦死した米兵の名前の羅列から始まるが、そこで最初に言及されるのは、バーリンの従軍初日に死んだビリー・ボーイ・ワトキンス (Billy Boy Watkins) であり、彼に関しては名前だけでなく、“Billy Boy had died of fright, scared to death on the field of battle”と死因も明記されている (1)。また、前半部のある章は“The issue, of course, was courage”という一文で始まり、戦場における勇気を試す常套句である“flee or fight”に言及している (80)。勇気というテーマは、他の優れた多くの戦争文学と同様、本作品においても重要かつ複雑な展開をみせている。

まず注意したいのは、*Cacciato* における勇敢か臆病かという判断は、カチアートの無許

可離隊をめぐる、両義的な問題として現れるということだ。第1章で、バーリンはカチアートの逃亡を“He did some pretty brave stuff. . . . You can't call him a coward” (15) と評価し、自分にももし勇気があれば彼に“join”できただろうと仮定法で述べる (23)。この時点ですでに、「逃げるこそ勇気」という主張によって“flee or fight”というクリシェの論理は転倒されている。これと併せて考えるべきなのは、カチアートというキャラクターが明らかにイノセンスのアレゴリーとして描かれているという事実である (8; 120)。彼は赤ん坊のような見た目で、戦争の悲惨さなどにまったく頓着せず、戦友に不気味がられるまでの“simplicity”(8)をもって淡々と事態に対処する。そしてカチアートをして単に「パリが見たい」という動機で無許可離隊を可能にさせたのは、彼のイノセンスであり、そしてそれはバーリンによって勇敢さであると解釈される。カチアートを媒介にして、イノセンスは勇気と同義となるのだ。

このように、カチアートはバーリンにとってイノセンスと勇気を体現する存在としてロマンティサイズの対象となり、*Cacciato* はそれを追いかける物語ということになる。だがこのロマンティサイズは、一種の偽装であると考えることができる。というのも、この物語全体が、じっさいには逃亡したカチアートを捕獲する任務においてバーリンが臆病さのあまり失禁しながら銃を乱射しカチアートを殺してしまったという記憶の抑圧の効果として読むこともできるからだ (Heberle 160)。小説冒頭で突如としてカチアートの顔面が内破するようなイメージにバーリンは襲われるが (14)、これはその時の記憶の断片的な回帰であり、彼がカチアートの顔をどうしても十全に思い出すことができないのもこのためであると考えられる (8; 120)。カチアートの逃避を勇気の証左であると解釈したうえで彼を追いかけるバーリンの戦略は、自らの臆病さと罪悪感を隠蔽することをひとつの大きな目的としているのだ。

そして小説終盤における現実への回帰の一環として、バーリンはこの臆病さと罪悪感とに直面せざるをえなくなっていく。たとえば先のイランで投獄される場面において、“So then . . . It is this Cacciato who is the deserter, yes? Who runs from civil and military obligation? . . . And you do not run? . . . You do not desert?” (225) という詰問にドク (Doc) というバーリンの超自我的存在がイエスと答えることで、罪はわれわれにではなくカチアートにあると彼らははっきり主張するし、パリに着いてからはエディ (Eddie) とオスカー (Oscar) が “Us or him” (293) という二択を彼に迫る。これらを通じて、バーリンは彼の妄想がカチアートという存在に全面的に依存していることを自覚させられることになり、カチアートをスケープゴートに仕立て上げることに罪悪感を抱き始めるのだ。

これと同様に重要なのが、序盤から彼らに同行しておりバーリンの妄想を随所で励まし手助けする、サーキン・オウン・ワン (Sarkin Aung Wan) というベトナム人の難民の少女である (むしろ彼女もまたバーリンの想像の産物だ)。金のイヤリングをつけている彼女は、明らかに、さきに触れた負傷したベトナム人少女が原型となっており、バーリンとワンは行軍中、徐々に恋人同士のようになってゆく。これはつまり、犠牲者同士のシンパ

シーという彼が求めて得られなかったものの代償として彼女が造形されていることを意味している。カチアートとワンはどちらも、バーリンの逃避的な空想の原因——罪悪感の隠蔽と自らの犠牲者化——であり、かつ手段なのだ。

バーリンの想像力の飛躍を助長するワンは、しかし、最終的に、リアリズムの問題を彼に突きつける。パリに到着してしばらく経った小説の終盤において、一行はホテルに宿泊しているが、ワンはふたりでアパートを借りて“settle”（296）しようとバーリンに持ちかける。彼は“We’re still soldiers”といって渋るが、ワンは“Forget them”と一蹴し、“Now we can make it permanent and real”として、この空想の逃避を現実にしてしまおうと使喚する（297）。さらに彼女は“It is time to choose”と最終的な決断を迫るが、バーリンはこれに“not realistic to just run off”と答えることになる（313）。こうしてリアリズムの問題が浮上する。

この直後にバーリンはパリ市内でカチアートを目撃し、つづいて、空想であるパリ・プロット内にさらにもう一段空想的な場面が現れ、バーリンとワンは1973年のパリ協定の会議に出席し、それぞれにスピーチを行う。そこでワンは、ふたたび彼を説得にかかる——

“Spec Four Paul Berlin: I am asking for a break from violence. But I am also asking for a positive commitment. You yearn for normality—an average house in an average town, a garden, perhaps a wife, the chance to grow old. Realize these things. Give up this fruitless pursuit of Cacciato. Forget him. . . . Do not deceived by false obligation. You are obliged, by all that is just and good, to pursue only the felicity that you yourself have imagined. . . . For what is true obligation? Is it not the obligation to pursue a life at peace with itself?” (318)

ここで彼女は、「暴力」（つまり戦争）に「平和」と「普通の生活」という「幸福」を対置し、従軍などは偽りの義務なのであって、むしろそれを放棄することこそが義務なのだ¹と主張している。ワンの図式においてアメリカという「ホーム」は、それが要求するものに関して、国家と家庭——とりあえずこう呼び分けておくが——とに区別されている。前者は従軍という悪を、後者は平和という善を要求するはずだと彼女は考えるわけだ。

だがバーリンはこれに対して、“Again, this has nothing whatever to do with politics or principle or matters of justice. My obligation is to people, not to principle or politics or justice”（320）と反論する。すなわち、自分に従軍を決意させたのは、国家ではなくむしろ家庭の論理だと彼は主張するのであり、さらにここで彼は、既に引用した“The Things They Didn’t Know”の章において表明していた、自分は“reasons beyond knowledge”によって従軍を決意したのだという意見を修正している。つまり彼は、一定のプレッシャーはあったものの、あくまで自らの意志に基づいて従軍を選択したのだとここで認めるのである。そのとき彼が受け入れているのは、自分は「何も知らなかった」わけではないという事実——つまりイノセンスの放棄である。

またここで彼は、「逃げることこそ勇気」という転倒した論理もまた否定している。つまり、「逃げたカチアートを追いかける」という名目によってカチアートに“deserter”の罪を着せることで成り立っていた空想の構造が、じつは自らの臆病さの隠蔽であったことを認めるのだ。そしてその臆病は、家庭の論理にしたがって従軍を決意してしまったことの臆病と一貫している——“Even in imagination we must obey the logic of what we started” (320) という彼の台詞は、そのような意味で発されているのだ。すでに従軍を選択してしまった者として、彼は「逃げるのは臆病」という戦場の論理にも従うことを正当にも甘受するのである。

カチアートを追いかけるのをやめない、という選択は、パリでカチアートの所在をすでに突き止めているこの時点において、空想の延長ではなく、カチアートを捕まえて空想に終止符を打つことを意味している。それは勇気の達成なのではなく、臆病な逃避の完遂であり、彼はそうすることで自らの選択に対する責任を取ろうとするのだ。だからこそ彼らがカチアートの住むアパートに突入する最後の場面においては、それまでつねにしんがりを務めていたバーリンが先頭に立たされるのだし、そこにカチアートの姿はなく——イノセンスの消滅とカチアートの死——、にもかかわらず彼は怖くてたまらず失禁してしましながら、やはり臆病さのあまり失禁しつつカチアートを殺してしまった現実を空想内に帰させることで、パリ・プロットを閉じるのである。

5. 結論——ベトナム戦争から「テロとの戦争」へ

以上見てきたように、*Cacciato* という小説は、第一に魔術的リアリズムを経由して国家の倫理的言説を脱構築しつつも、さらに進んで、個人としての倫理を再構築するテキストであった。それはアメリカという国家からは一定の距離をとりながらも、しかしアメリカ人としてベトナム戦争に従軍し、帰還兵としてアメリカに生活し、アメリカ人作家として執筆をつづけるオブライエン自身の倫理の引き受けかたであるだろう。オブライエンの執筆とバーリンの空想はパラレルをなしており、彼らは *Cacciato* というテキストを介してともにそれぞれの倫理を再構築するのだ。のちにベトナム戦争小説の最高傑作と評される *The Things They Carried* (1990) において、オブライエンは個人の問題へとより深入りしてゆくことになるが、それは 78 年の *Cacciato* における上述のプロセスを通過しなければ成しえなかった達成であっただろう。

さて、「テロとの戦争」における「新しい」問題、すなわち戦争と敵の倫理化という問題は、ベトナム戦争においても観察されることが確認された。ここで本稿が付言しておきたいのは、アメリカは自らの武力行使の正当性が危ういとき、つねに倫理化という方法に訴えてきたのではないかということだ。その起源としてわれわれは、ベトナム戦争よりもさらに遡って、原子爆弾の投下とトルーマンの声明を想起しないわけにはゆかない。むしろアメリカが名指す「悪」は、全体主義、共産主義、テロリズム、「悪の枢軸」などと、幾度も形を変えてきたし、倫理化の問題の様相はそれぞれで大きく異なる。だがわれわれは、遅

くとも 1945 年には開始されていたアメリカによる戦争の倫理化の身振りを系譜化し、再検討する必要があるだろう。本稿はその足掛かりのひとつとなることを願っている。

註

1. 本稿は2016年4月9-10日に東京大学本郷キャンパスで開かれたCross Lingual Network第4回研究集会において発表した原稿を大幅に改稿したものである。
2. 本稿は、英語文献の引用にさいして、①ティム・オブライエンの作品に関しては英語のままで引用し、それ以外については、②邦訳のないものはすべて拙訳により、③邦訳のあるものは邦訳を用いる、という方針を取った。ただし③に関しては原文と照合して適宜修正したことをお断りしておく。また、第1節における引用内での強調はすべて引用者により、第2節以降は原文によるものである。
3. アメリカは宣戦布告をしなかったため、開戦のタイミングは曖昧とされるが、アメリカの段階的な介入をインドシナ戦争に遡って詳述したものとして、ラグヴァルを参照。
4. 最初期のものはフリードマン（21）。ほかに、本文で扱うアルヴァに加えて、カクタニ、ベイドラー（11）など。
5. *Anatomy of Criticism* の“The Mythos of Summer: Romance”を参照。
6. これはたとえば、ある集団なら集団を〈他者〉であるがゆえに「野蛮」であり究極的には「悪」であると見做すような言説がポリティカル・コレクトネスの議論において問題視されたとき、その集団を〈他者〉と表現することが難しくなるといった事態を想定すればわかりやすい。
7. ここでは“idle curiosity”をこのように訳しておいたが、ジェイムソンの意図はポストモダニズムの歴史的文脈を無視してなんでもかんでも取り入れようとする傾向を批判することにあるので、この“idle”は「単なる」とか「むなしい」といった訳語を充てるべきかもしれない。
8. 語り手はこれを“cartoon”と呼んでいる（242; 244）。ここであるはずのない逃走用の車が用意されていることに関して“he was a miracle man. So why not?”と説明されていたり（234）、のちにアテネで下船する際には「息を止める」だけで検閲を通過できてしまうといったように（273）、オブライエンは解決方法を意図的に徐々に杜撰にしているように思われる。
9. ジョン・トムリンソン *Cultural Imperialism* を参照。またエイミー・カプランも *Cultures of United States Imperialism* の有名な序文でこの問題を扱っている。
10. 彼らの行軍をアメリカの西漸運動と重ねる読みもごく初期から提出されている。スティーヴン・カプランの入門書のほか、*American Exceptionalism in the Age of Globalization* というタイトルを付しながらベトナム戦争小説のみを扱って9.11以後のアメリカの問題を考察しているウィリアム・スパノスを参照。
11. 三浦論が直接的に扱っているのはオブライエンの第5長編である *The Things They Carried* だが、タイトルからも明らかのようにこれは“The Things They Didn't Know”と同一のテーマを発展的に扱った作品と読むことができ、故郷の人々の期待（というプレッシャー）を意識して従軍を決意する経緯を描いている。*Things* 所収の“On the Rainy River”を参照。

引用文献

- Arva, Eugene L. *The Traumatic Imagination: Histories of Violence in Magical Realist Fiction*. New York: Cambria, 2011.
- Beidler, Philip D. *Re-writing America: Vietnam Authors in Their Generation*. Athens: U of Georgia P, 1991.
- Foster, Hal. *The Return of the Real*. Cambridge: MIT P, 1996.
- Freedman, Richard. “A Separate Peace.” *New York Times Book Review*, 12 Feb. 1978, www.nytimes.com/books/98/09/20/specials/obrien-cacciato.html.

- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism: Four Essays*. Princeton: Princeton UP, 1957.
- Heberle, Mark. "Teaching *Going after Cacciato* and *The Things They Carried* in the Context of Trauma." *Approaches to Teaching the Works of Tim O'Brien*. Ed. Alex Vernon and Catherine Calloway. New York: MLA, 2010. 156-62.
- Herzog, Tobey C. *Tim O'Brien*. New York: Twayne, 1997.
- . *Postmodernism, Or, the Cultural Logic of Late Capitalism*. New York: Duke UP, 1991.
- Kakutani, Michiko. "Books of the Times; Slogging Surreally in the Vietnamese Jungle." *New York Times Book Review*, 6 Mar. 1990, www.nytimes.com/1990/03/06/books/books-of-the-times-slogging-surreally-in-the-vietnamese-jungle.html.
- Kaplan, Amy. "'Left Alone with America': The Absence of Empire in the Study of American Culture." *Cultures of United States Imperialism*. Ed. Amy Kaplan and Donald E. Pease. Durham: Duke UP, 1993. 3-21.
- Kaplan, Steven. *Understanding Tim O'Brien*. Columbia: U of South Carolina P, 1995.
- Kenney, Katherine. *Friendly Fire: American Images of the Vietnam War*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Logevall, Fredrik. *Embers of War: The Fall of an Empire and the Making of America's Vietnam*. New York: Random House, 2013.
- O'Brien, Tim. *Going after Cacciato*. New York: Broadway, 1999.
- . *The Things They Carried*. New York: Mariner, 2009.
- Seltzer, Mark. *Serial Killers: Death and Life in America's Wound Culture*. New York: Routledge, 1998.
- Spanos, William V. *American Exceptionalism in the Age of Globalization: The Specter of Vietnam*. New York: State U of New York P, 2008.
- Womack, Anne-Marie. "'Just a Creature of his Own Making': Metafiction, Identification, and Gender in *Going after Cacciato*." *Modern Fiction Studies*. 59.4 (2013): 811-32.
- ジェイムソン、フレドリック『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳、平凡社ライブラリー、2010年。(Frederic Jameson. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. New York: Cornell UP, 1981.)
- トムリンソン、ジョン『文化帝国主義』片岡信訳、青土社、1997年。(John Tomlinson. *Cultural Imperialism: A Critical Introduction*. London: Continuum, 1991.)
- ネグリ、アントニオ、マイケル・ハート『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲ほか訳、以文社、2003年。(Michael Hardt, Antonio Negri. *Empire*. Cambridge: Harvard UP, 2000.)
- .『マルチチュード——〈帝国〉時代の戦争と民主主義』幾島幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修、2015年。(———. *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*. New York: Penguin, 2004.)
- マイケルズ、ウォルター・ベン『シニフィアンのかたち——一九六七年から歴史の終わりまで』三浦玲一訳、彩流社、2006年。(Walter Benn Michaels. *The Shape of the Signifier: 1967 to the End of History*. Princeton: Princeton UP, 2004.)
- 三浦玲一『村上春樹とポストモダン・ジャパン——グローバル化の文化と文学』彩流社、2014年。

Deconstruction and Reconstruction of Ethics: Magical Representation in Tim O'Brien's *Going after Cacciato*

ABE Kodai

Some critics argue that the expression of “War on Terror” introduced a new instance into American war-related discourse: Condemning the enemy as “evil,” it de-politicizes/ethicalizes warfare. This paper, however, tries to find the origin of the ethicalization by going back to the Vietnam War, reading Tim O'Brien's 1978 Vietnam War novel, *Going after Cacciato*. The problematics in this work is not limited to the Vietnam War; it has a broad range expanding to the general problem of war and ethics of America, which makes it worth reading in the 21st century.

I will first consider *Cacciato*'s aesthetic features, often described by the term “magical realism.” Although there is certain validity in the explanation that magical representation is a correlation of trauma's unrepresentability (therefore deviation from realism), I will point out a problem in this explanation and argue that the magical representation in *Cacciato* is the effect of deconstruction of good and evil dualism. Next, paying attention to the symptomatic breaking down of magical representation around the middle of the novel, I will demonstrate that it gradually establishes an accomplice with American cultural imperialism. Lastly, the protagonist is forced to confront the problems of courage and ethics; toward the end of the novel, he admits his cowardice and the loss of innocence, and takes responsibility to go back to reality/realism following his own will, reconstructing ethics according to another economy. In the process, we will explore *Cacciato*'s critical potential for the “new” problem of the ethicalization of warfare.